

更新されない「がん情報」 それでも“国立がんセンター”か？

国立がんセンターは日本を代表するがん専門病院で、日本のがん医療をリードすると自負するナショナルセンターです。しかし、実態はまったく違っていると思わざるを得ない事実が判明しました。

■ 国立がんセンターのホームページの内容

皆さんは、国立がんセンターのホームページをご覧になったことはありますか。ここでは、「がんに関する情報」として、「医療従事者向けがん情報」と「一般向けがん情報」のコーナーが設けられています。

「医療従事者向けがん情報」を開いて見てください。そこで提供されているがん情報は、急性骨髄性白血病(成人)、骨髄異形成症候群、骨髄腫、小細胞癌、中皮腫、非小細胞癌、ホジキン病、膵癌の8項目にとどまっています。すなわち、胃がん、大腸がん、肝がん、乳がんなどに関する記述は載っていません。なぜなのでしょう。すでに他の機関によって、がん診療のガイドラインがホームページ上でも提供されているので、国立がんセンターとして、わざわざ載せる必要はないということでしょうか。

この素朴な質問に対する厚労省医政局国立病院課の回答は、次のようなものです。

「国立がんセンターがん情報サービスは、医師、研究者等の国立がんセンターの職員が、日常の診療または研究業務の合間に作成している。作成においては、一般向け情報を優先しており、そのため医療従事者向けがん情報については、限定的な種類のがんについてしか記述できない、更新が滞るなど部分的な情報提供にとどまっている」

■ なぜ厚労省研究班のガイドラインを引用しないのか

これまで厚労省は、EBM（根拠に基づいた医療）を推進する観点から、がんの部位ごとに研究班を組織し、「がん診療のガイドライン」を各学会が作成することを支援してきました。その成果は、各種機関のホームページでも公開されています。その成果を活用することなく、国立がんセンター職員が片手間に診療ガイドラインを作成することの意味が理解できません。

さらに、更新が滞る結果、こんな事態も起きています。

8つのがんに関する「医療従事者向けがん情報」のうち、肺がんの非小細胞癌のIV期における治療については、次のような記述がなされています。

「非小細胞癌のIV期症例のような進行例では、特に化学療法は標準的治療とはいいがたく、できるだけ臨床試験の一環として施行することが望ましい。」

一方、日本肺癌学会編の「肺癌診療ガイドライン 2005 年度版」によれば、非小細胞肺癌ステージⅣ期の全身治療「化学療法の役割」には次のように記載されています。

○ 化学療法の役割

<推奨>

ステージⅣ期の非小細胞肺癌に対する抗癌剤治療は生存期間を延長しQOLも改善することから、行なうよう強く勧められる（グレードA）

<エビデンス>

いくつかのメタアナリシスにより、進行非小細胞癌に対して化学療法を行なうことにより、有意に生存期間が改善することが示されている。

日本肺癌学会編のガイドラインは、このあと、薬剤の選択等についても述べています。ちなみに、PDQの日本語版でも同様の評価と薬剤の選択枝を示しています。

これらのガイドラインでの記述と、国立がんセンターのホームページにおける「非小細胞肺癌ステージⅣ期」の記述を比べると、「一般向けがん情報」においても、がんセンターの記述は明らかに患者に冷たく、その内容も貧弱だといわざるを得ません。

■ 4年間も更新をしていない！ なんでやねん！

私が指摘した「医療従事者向けがん情報」の非小細胞癌のⅣ期における治療についての記述は、「2002年3月になされたものである」こと、そして「作成当時のがんセンターの判断だった」との回答を得たときには驚きました。

がん医療は日進月歩です。それにもかかわらず、4年以上にもわたってホームページの情報を更新しない。それでも「国立がんセンター」と名乗れるのでしょうか。

さらに驚くことには、このコーナーの管理は「国立がんセンター情報委員会」が担当しているとの回答とともに示された委員の名簿です。

がん予防・検診研究センター長を委員長に、センターの重要な役職者29名が名前を連ねています。それなのに、この状態であるということは、がん情報の提供について、国立がんセンターはまったく無頓着だということです。

国立がんセンターの「がん情報サービス」(NCC-CIS)については、同センターのホームページで次のように説明されています。皮肉が利きすぎていると思いますが、引用しておきます。

NCC-CISは、国立がんセンター情報委員会による、がん患者さんやその家族、治療にあたる医師、看護師、その他の医療従事者のためのがんに関する最新情報を提供するサービスです。

NCC-CISに記載されている情報は、がんの専門家委員会によってチェックされ、定期的に最新のものに更新し、随時新しい項目を加えております。さらに、患者さんが自分でどのようにがんを見つけるか、そのセルフチェック（自己診断）の方法や、その危険信号は何かなども記載されています。また、標準的治療法や新しい治療（臨床

試験)、治療の具体的説明と副作用、患者さんのケア方法、病院のリスト、講演会案内などの情報も提供します。

■ 国立がんセンター病院と研究所の役割は？

非小細胞がんIV期の治療法に関するがんセンターの記述を読んで、ある医師は「非小細胞がんは、IV期こそ化学療法の出番だ。がんセンターは正直に、“IV期になれば治療はしない”という姿勢を明確にしているのではないか」と教えてくれました。私も同感です。

国立がんセンターにセカンドオピニオンを求めたら、一世代前の抗がん剤の組み合わせを示され、危うく効果的な新治療法を受け損ねる事態になりかねなかったという話を患者仲間から聞きました。

国民は、「国立がんセンター」では最新の治療が受けられる、国立がんセンターが提供する情報がもっとも正しいと思いがちですが、そこに大きな落とし穴がある。そのことの一部が、今回の「情報更新の放置」で明らかになったような気がします。

国立がんセンターでは、「本年10月のがん対策情報センターの開設に向け、専任の情報提供担当者を配置して、質的、量的に充実した情報を迅速に提供できるよう、諸準備に努めている」そうです。

国民や医療従事者向けの情報提供において完全に出遅れてしまった国立がんセンター。その原因の解明こそが、国立がんセンターが取り組むべき最優先課題だと思います。

そして、平成22年度の独立行政法人化に向けて、「国立がんセンター」の病院ならびに研究部門について、その役割を再検討することが求められています（この事項については、別稿で述べる予定です）。